

山師あるいは冒険者

—— 二十世紀初頭のドイツ語圏文学に現れるカサノヴァ像 ——

荒 又 雄 介

十九世紀末から十数年間、ドイツ語圏の文学に、カサノヴァを登場人物とする作品が数多く現れる。世紀末の雰囲気濃厚に湛えたホーフマンスタールの抒情劇から、第一次大戦のさなかに書かれたシュニッツラーの作品を経て戦間期に至るまで、誘惑者のモチーフは、時代の変遷と歩みを共にしながら様々な面を見せる。

「誘惑者」の言葉から、まず連想されるのはドン・ファンであろう。しかし、前述の時代は、いわばカサノヴァ復権の時代であった。スペイン・バロック伝説の暗い情念は影をひそめ、ロココの風俗が華やかに描かれる。人々が求めたのは、破滅型の誘惑者の孤独で悲壮な姿ではなく、享乐的な山師の人生の豊かさであった。Verführer と平行して Abenteuerer が好んで使われた言葉であった。

二十世紀初頭に相次いで発表されたエッセイを見ると、カサノヴァに投影されていた期待の手がかりを得ることが出来る。本発表では、その代表的な例として三人の作家、ヤコブ・ヴァッサーマン、フェーリクス・ザルテン、そしてフランツ・ブライの文章を紹介した。1901年に発表されたヴァッサーマンのエッセイで、カサノヴァはルソーと比較して論じられるという好待遇を受けている。自然の中で沈黙考するルソーとは対照的に、カサノヴァはロココ時代の都会的享楽主義の代表として取り扱われる。

享乐的な生涯を送ったカサノヴァに『人生の達人』(1910)という定型を与えたザルテンは、これに加えて、ためらうことなく危険に身をさらすカサノヴァの冒険的性格にも言及している。小心翼翼と身の安全に心を配っている限り、カサノヴァ的人生は望むべくもない。ザルテンの描き出す、僅かなチャンスにすべてを賭ける「冒険者」は、市民的生活に退屈を感じる若者たちの目に、一人の英雄と映ったにちがいない。

ところで、人生そのものが賭博のような冒険者が、激しい浮き沈みがあるにせよ、なんとか老年までたどり着くには、やはり第三者の助力が不可欠である。この助力の要素をザルテンとブライは、カサノヴァを愛した女性に見た。彼らの主張するところによれば、カサノヴァの愛は長く続くものではなかったが、つかの間の恋に彼は全力を傾注した。短い間ではあれ、カサノヴァは完全に当の女性のものであった。女たちのために、大金をばら撒き、有利な職を投げ打って省みない。こうした打算なき振る舞いゆえに、のちのち女たちはカサノヴァを助ける気になったのだと、ブライは1923年のエッセイで述べている。

こうして形作られたカサノヴァ像は、文学作品の中でも繰り返し現われる。本発表ではその具体例としてブライの戯曲『カサノヴァ』(1918)を取り上げた。この作品では、上に述べた要素が一つ残らず描き出されている。都会的に洗練された振る舞い、リスクの高い

金策、そんなカサノヴァに進んで身を任せる女性はまた、彼への助力も惜しまない。

定型の踏襲と並んで興味深いのは、劇中、ブライが過去のカサノヴァ作品への参照を促していることである。ブライは、カサノヴァが以前ヴァイデンシュタム男爵と名乗っていたとほめかしているが、この名前を聞けばホーフマンスタールの作品『山師と歌姫』(1899)を誰もが思い出すはずである。ホーフマンスタールは『回想録』に描かれたカサノヴァと歌姫の恋物語に触発されて、その後日談、すなわち二人の再会の場面を劇にした。このときカサノヴァは、歌姫の生んだ自分の息子に出会う。それを受けてブライは、青年になった息子をカサノヴァに再び引き合わせるのである。短い期間に相次いで書かれたカサノヴァ作品は、互いに照応しながら、いわば共同でカサノヴァ像を編み上げていった。こうして形成されたカサノヴァ像は、時代の好みを反映した定型として、数多くの作品を生み出したのである。

ところで、カサノヴァ作品流行の背景には、「冒険」に対する市民社会の憧れがあったと考えられる。本発表では、当時の冒険概念の具体例として、ジンメルの論文『冒険』(1913)に言及した。日常生活の延長上で理解されうるような体験は、冒険とは呼びがたい。しかし、非日常の体験が、その後の人生に何の痕跡も残さないようなら、それもまた冒険の名に値しない、以上が、論文冒頭のジンメルのテーゼである。ここで興味深いのは、ジンメルが提出し、時代のカサノヴァブームにも良くなじむこのテーゼが、カサノヴァ自身の「冒険」とは大きく異なっているという事実である。冒険の前と後で変わる事のない人生の連続性を確信できる者だけが、テーゼに見られるような冒険への期待を口に出来る。山師カサノヴァにとって「冒険」の後に待っているのは、身の破滅か大成功のどちらかであって、「冒険」に内面的成熟の契機を求めることなど、思いもよらなかったにちがいない。市民社会におけるロココのヴェネツィア人への関心の背景には、安全無事な日常を確保した市民の奔放な人生に対する極めて市民的な憧れがあったのではなかろうか。

二十世紀初頭のカサノヴァ像は個別の作家の創作ではない。まず、実在のカサノヴァの人生があった。これを老年の彼が書き留める。自分一個の人生から、文学のひとつの典型を作り上げた。この典型に市民社会がおのれの夢を盛る器を見出すことになるのである。数多くの作品を丹念に探れば、カサノヴァという文学形象が成熟し、その後、徐々に硬直化していく様子を見て取ることが出来るだろう。そして、その背景に、第一次世界大戦前にわが世を謳歌した豊かな市民階級の姿までもが透けて見えてくるはずなのだ。